

ジェンダー平等の実現に向けて



性別に関わらずだれもが、仕事と家庭を両立できるようにすることが大事



偏見やハンデに負けずに野球というスポーツで闘っている姿はカッコよくて素晴らしい

野球を楽しめるのは女子野球も同じ。好きな気持ちを大切に



自分がこうだと考えていた価値観と現実が全然違うことに驚きました

現状や課題について初めて知ることも多く、もっと身近なジェンダー問題について考えたいと思った

ジェンダーは人によって違うので、自分の中の価値観を人に押しつけて無意識に傷つけてしまわないよう気をつけたい

固定概念にとらわれずに物事を考えることが大事

男性も相談できることをもっと周知していく必要がある。相談先も増やしていく。性別に関わらずに相談できるように

自分らしさに自信が持てるようになった

みんなが幸せに生きていける社会を目指して、今後もジェンダー問題に積極的に取り組んでいきたい

好きなことを続けられる環境を！！

様々な考えが出る中で、なぜそうするのか、どうしてそのことが問題なのかを考えられる楽しい話し合いができた

自分1人の力じゃ何も変わらないと思って生きてきたが、話を聞いて変えられることもあるのではないかと思うことができた

自分らしい生き方を選んだからこそ出逢えた幸せがある

「自分らしくとは何なのか」についてすごく考えられた。自分自身の生き方を見つめなおしていきたい

スポーツにも男と女で壁があることがわかった。少しずつ変われるように自分も何かしていきたい

ジェンダーバイアスについて学ぶことで社会から少しずつ無意識の偏見を取り除いていくことが必要

性別に関わらずやりたいこと、好きなことを発信できる社会に

若い世代からのジェンダー平等推進事業 ジェンダー平等ミーティング

5 ジェンダー平等を実現しよう



ジェンダー平等社会の実現に向け、若い世代のみなさんが月に一回、テーマに沿って、意見交流をしています。同世代がどのように考えているかを知り、自分自身の考えを広げるとともに、新しいつながりを作り、誰もが暮らしやすい社会づくりのための方策を出し合っています。





聖泉大学4年生

佐々木藍さん



今年度のジェンダー平等ミーティングでは、様々な方からの話題提供によって改めてジェンダー平等について深く考えることができました。また、大学生のみならず多様な年代の参加者の方々と意見交換ができたことで、自分では気付けないような新たな視点や感覚を得ることもあり、大変有意義な時間でした。

今年度のミーティングの様子はテレビや雑誌などのメディア媒体に取り上げていただく機会もありました。そうしたことをきっかけにより多くの方々がこのミーティングの存在を知り、参加してくださることで、さらに多様な視点からの意見交換ができるようになっていけば何よりだと考えます。

私は大学で「メディアとジェンダー」に関する研究を行っています。研究に際して、このジェンダー平等ミーティングで話題提供を行ってくださった方との繋がりが活きる場面もありました。このミーティングは、そのように新たな繋がりを作れる場でもあると思います。

「ジェンダー」について関心がある方、もっと知りたいとお考えの方、何だかよく分からないという方も、ジェンダー平等ミーティングに参加することでジェンダーについて深く考え、新たな視点を得るきっかけになるかもしれません。ぜひお気軽に参加してみてください。

聖泉大学4年生

橋爪佑果さん



私は、ジェンダー平等ミーティングに参加したことをきっかけに、制服や校則などの学校でのジェンダー平等・不平等に興味を持ちました。

自分が小学校、中学校、高校で生活しているときには、男子と女子で分けられることに違和感があっても、「それが普通」、「当たり前のこと」という考え方をしていました。

しかし、ジェンダー平等ミーティングに参加して、実際に男女で分けられた不平等な校則や制服によって苦しめられている人がいることを知り、ジェンダー不平等な校則や制服は「当たり前のこと」ではなく「あつてはならないもの」であると感じ、卒業研究でこの問題について取り組むことにしました。

私が、卒業研究でインタビューをした人の中にも、学校でのジェンダー不平等を感じていた人は少なくありませんでした。また、「着たくない」と感じる制服であっても校則によって着ていかなければならなかった人もいたことがわかりました。

一部の高校で導入されているスラックスやキュロットを履くことができる制度や私服で登校できる校則がもっと多くの学校で導入され、生徒が自分の気持ちに合わせて自由に選択でき、ジェンダー不平等によって苦しめられること無く、快適に学校生活を送ることができるようになることを願っています。



長浜バイオ大学4年生

鄧思朗さん



私はジェンダー平等ミーティングに参加して、ジェンダーについて様々な知識を身に付けることができ、物の見方を広げるようになりました。また、年齢と背景問わずに様々な方と意見交流して、人それぞれの考え方や発想をお互いに共有し、物事に対していろんな角度からより深く考えることができました。

日常によく使われる言葉や、気づかない些細な行為でも大きい影響を与えることを理解し、人と接する際に改めて言葉遣いなどに気を付け、よりスムーズな会話環境を作れるようになりました。

ジェンダー平等ミーティングで最も印象に残るのはデートDV問題です。恋愛や婚姻関係の中で女性が被害者だとよく思われていますが、実際にはジェンダーに関係なくどちらでもDVを受けた事例が多いです。さらに男性のほうが世間に加害者だと思われやすく、DVを受けても気づかれない場合が多いそうです。また、DVということはただの肉体的な暴力だけではなく、むしろ精神的な暴力がよく行われています。海外では「emotional abuse」(感情的な恐喝)という言葉があって、親しい関係の中でよく発生しています。特に親子関係、そして恋愛や婚姻関係にこの行為が大切な人に精神上的な暴力を加える者が存在します。これが社会の中に起きている様々な悲劇の主な原因の一つだと思います。

聖泉大学4年生

堀隼人さん



私はジェンダー平等ミーティングに参加して、これまで自分自身が如何に無知であり、偏った情報を見ており狭い視野であったかに気づかされるきっかけとなりました。さらに、これまでに自分の中にある価値観が如何に両親や祖父母の影響を受けて構成されてきたかを学びました。そのような中で、これまで自身の行動がジェンダーの面から差別に当たる行動をしていたことを知り、自分自身に対して不快な気分になったこともあり。しかし、その一方で両親や祖父母から影響を受けた価値観が否定されているかのように感じたことがあり、自身の中で葛藤が生じたことがありました。このような葛藤も、ジェンダー平等ミーティングを通じて様々な方の意見に触れてきたことから解消されたものもあります。また、自分自身の中で新たな気づきを得ることができました。ジェンダー平等ミーティング以外にも様々な面からジェンダー平等について学ぶようになりました。

大学では「戦争とジェンダー」に関する研究に取り組まれました。卒業論文では、特に日本人大学生を対象にインタビューを行いました。インタビューを行った中で、戦争に関わる軍人や徴兵制度といったものに対して男性には当事者意識がありました。一方、中には徴兵制度の復活に反対しない人もいました。一方で女性には当事者意識があまり見られませんでした。卒業論文はまだまだ多くの分析課題が残るものとなりました。そのため、今後もさらに視野を広げて学んでいきたいと考えております。

大学生が、ジェンダーの視点から卒業論文を執筆しました

01

卒業論文(要旨) 「戦争とジェンダー」

聖泉大学4年生 堀隼人さん

本論では、日本人大学生へのインタビュー調査で得られた語りをもとに、ジェンダーの視点から戦争に纏わる諸課題について分析を行った。

調査結果から、日本人大学生のほとんどがこれまでに平和学習に取り組んでおり、修学旅行先として、特に沖縄県、広島県を訪れていることがわかった。その中でも女性の多くに「悲惨」「酷い」「(戦争を)起こしてほしくない」といった感情的な語りが確認できた。一方で、男性には感情的な語りが見られず、教育の一環であると捉えていることがわかった。

次に「軍人」、「日本軍」、「自衛隊」のイメージで全てに共通して見られたのは、「規則正しい」、「上下関係厳しい」であった。その中でも男性は「軍人」と「自衛

02

卒業論文(要旨)

「日本映画における

ジェンダー表象の変遷」

聖泉大学4年生 佐々木藍さん

昨今のジェンダー平等意識の高まりによってメディアが描き出すジェンダー表象がどのように変化しているのかを検討するため、日本アカデミー賞最優秀作品賞を受賞した邦画から年代ごとに「幸福の黄色いハンカチ」(1977年)、「火宅の人」(1986年)、「午後の遺言状」(1995年)、「半落ち」(2004年)、「舟を編む」(2013年)、「ある男」(2022年)の6作品を取り上げ分析、考察した。

作品ごとに登場人物の行動、台詞、男性性・女性性(ジェンダーバイアス)の描かれ方など様々な描写をピックアップし、各作品における登場人物の人物、描かれる夫婦像、服装、性描写、さらにそれらと社会情勢の変化との関連性を分析した。

全体的な人柄の傾向は感情の表出が分かりやすく激しいものから淡々と落ち着いたものへ、夫婦像は妻が夫に追従する関係から対等な関係へと変容し、性的接触描写は減少していた。反対に、男女の服装の傾向などあまり変化のない部分も見られた。

今回取り上げた映画作品が制作された50年間の日本では、男女平等社会に向けた様々な政策が打ち出されている。そうして社会的風潮が変化したことにより、社会が映像作品に求めるものも変化していったと考えられる。

隊」に、「国や国民のために命を懸けている職業」というイメージを持っていた。また「自衛隊」は、男女共通して、戦っているよりも災害救助、被災地支援のイメージが強いことがわかった。一方で、「日本軍」に対しては、協力者の多くが「軍の上層部が無茶、無謀な作戦を多く立案、実行していた」といったよくないイメージを抱いていることが明らかとなった。

続いて、日本人大学生が軍事的男性性の影響を受けていることが明らかとなった。男性の語りからは過去に軍事的男性性とも考えられる指導を部活動で受けたことから、自分らしく生きるという反発をしていたことがわかった。学校行事では「クラスが勝つために、最後までやり切る」といった軍事的男性性のような雰囲気、男女問わず形成されていたこともわかった。

次に日本人大学生が、徴兵制に対して反対していることがわかった。しかし、一部の男性は、自国の置かれている状況や国際情勢を知るきっかけとなることから賛成していると語っていた。

戦争についても反対していることが明らかとなった。戦いではなく会話による解決を望んでいる語りが多く見られた。最後に、日本人大学生はジェンダー平等について、当たり前の状態になっていくことを望んでいることがわかった。

しかし、男性の語りからは、女性の方が優遇されていると感じていることが明らかとなった。

03

卒業論文(要旨)

「校則に関する研究」

聖泉大学4年生 橋爪佑果さん

本論の目的は、高校における校則の現状を明らかにし、たうえて、生徒や教員がより快適な学校生活を送ることができるように、改善策などの具体的な提案を行うことにある。

公立高校と私立高校の卒業生それぞれ10名を対象にインタビュー調査を行った。

調査の結果、本来、生徒の成長や安全のために存在している校則の一部が、ジェンダー不平等なものであり、生徒を苦しめる原因となっていることが明らかになった。分析結果をもとに、生徒や教員が快適な生活を送れるよう、具体的な改善策を提案した。

生徒と教員の快適な生活のためには、現在の教員文化、生徒文化、学校文化を大きく変える必要があると考えている。

そのためには、生徒の校則に対する意見を学校へ正しく伝える必要があるのではないだろうか。そして、生徒一人ひとりが抱えている意見を、生徒会などが代表して取りまとめ、学校へ定期的に報告できる場を設けることが有効であると考えられる。報告の場を設けることで、教員の意見と生徒の意見の相違点が明らかになる。学校全体の問題として校則について話し合うことで、学校独自の風土に寄り添った学校文化としての校則を、生徒と教員が共に作り上げていくことができるだろう。